調査報告　一一二一六

仮名字母の出現傾向から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付け（2）

齊藤　鉄也

一　はじめに

本稿は、前稿[6]に引き続き、仮名字母の出現傾向に着目して、紅梅文庫旧蔵本源氏物語[1]と、その奥書にある明応四（一四九五）年に近い時期に書写されたと考えられる源氏物語写本、三条西実隆に関係のある源氏物語写本の比較を行った。前稿では第一帖「桐壺」から第二十七帖「篝火」まで調査対象としたので、本稿では、第二十八帖「野分」から第五十四帖「夢浮橋」までを加えて、改めて全帖を調査対象とした。今回、調査対象とした源氏物語写本には、前稿と同様に書陵部蔵三条西家本、保坂本、大正大学本に加え、三条西実隆が書写した（とされる）榊原家本「桐壺」と蓬左文庫蔵三条西家本「空蟬」「関屋」を加えた。調査結果からは、紅梅文庫旧蔵本源氏物語の中に、明応四年に近い時期に書写された実隆筆の可能性がある写本と、仮名字母の出現傾向が近い写本が存在する可能性は低いことが明らかになった。その一方で、紅梅文庫旧蔵本「横笛」は、榊原家本「桐壺」と蓬左文庫蔵三条西家本「空蟬」と距離が近いことが明ら

かになった。残念なことに、本方法では、仮名字母の出現傾向の類似性によって写本間に何らかの関係がある可能性を指摘できるが、この調査結果が意味することやその原因を明らかにすることはできない。この点に関しては、関連する分野からの異なる対象や手法に基づいた調査報告が必要である。尚、以下、本稿では、源氏物語写本の名称を、紅梅文庫旧蔵本は紅梅本、書陵部蔵三条西家本は書陵部本、日本大学蔵三条西家本は日大本、蓬左文庫蔵三条西家本は蓬左本と略す。

二　本調査の目的と関連研究

本調査の目的は、紅梅本の中に、実隆筆写本と似た仮名字母の出現傾向を持つ写本の存在の有無を確認することである。特に、文明年間（一四六九―一四八七）に近い時期に書写された実隆筆写本と仮名字母の出現傾向が似た写本が紅梅本の中に存在すれば、奥書の記述とは別に、紅梅本が文明年間に書写された実隆筆の源氏物語写本との関係がある可能性を指摘でき、紅梅本の位置付けの議論に貢献できる可能性がある。

古典籍に特徴的に出現する変体仮名の出現傾向は、書写年代や書写者、親本といった要因によって影響を受けると考えられるが、その詳細は不明なことが多い。写本本文に大量に存在し、調査し易く、平安時代から江戸時代まで長期間に渡って存在する変体仮名を比較することで、書写者や書写年代に関する知見が得られるのであれば、書誌情報とは異なる根拠に基づいて、書誌学や文献学の知見の蓋然性の向上や、写本に関する新たな仮説の提案が可能であろう。稿者はこれまで、変体仮名の字母の出現傾向に対して統計的手法を用いた分類を行い、その結果を書誌情報と比較することで、写本の書写者の推定や、同一書写者による写本の年代推定ができる可能性を指摘してきた[2][3][4][5]

[6]。その調査では、次の四つの作業仮説を挙げた。(1)同一人物によって書写された写本であれば、書写の際の字母の選択(「字母遣い」)は共通性が存在する。(2)異なる人物によって書写された写本であれば、「字母遣い」の共通性は少ない。一方で、(3)同一人物によって書写された写本の「字母遣い」に共通性が少ない場合や、(4)異なる人物によって書写された写本の「字母遣い」に共通性がある場合は、何らかの理由が存在する可能性を考慮に入れ、書誌情報といった関連する調査結果との比較が必要となる、と考えている。

これまでの調査結果からは、仮名字母の出現傾向の似た写本は同筆の可能性があることや、筆跡が異なり他筆であったとしても、書写者間や写本間に関係がある写本の可能性があることが明らかになってきた。この仮名字母の出現傾向に対する統計手法の適用により、書写時期が近い写本や書誌情報から関係が指摘されている大量の写本を一括して「自動的」に分類し、既に関係が指摘されている写本間関係の蓋然性を高めることに加えて、これまで関係が指摘されていなかった写本間関係を発見できる利点がある。もちろん、仮名字母の出現傾向という一視点から写本間に関係がある可能性を指摘できたとしても、その意味することやその原因は明らかではなく、関連する分野の専門家による検証が必要である。しかし、大量の写本の中から関係する写本を発見することや専門家を必要とする調査を実施することは容易ではない。統計手法は、その前段階として大量の写本を対象に、関係が指摘される写本を選択し、仮説を提案する調査として利用できる。

そこで、本調査でも前稿と同様に、本文の仮名字母の出現傾向を用いて、(1)書陵部本の推定書写年代に近い時期の実隆筆写本と写本間距離の近い写本の探索と、(2)この時期の実隆筆写本と距離の近い紅梅本の写本の存在の有無の確認、加えて、(3)新たに追加した榊原家本と蓬左文庫本の実隆筆写本と距離の近い写本の探索をする。これにより、紅梅本の中に、明応四年に近い時期の実隆筆写本と距離が近い写本が存在すれば、奥書の記述とは異なる根拠によって、

その記述の蓋然性を高めることができる可能性がある。

三　調査対象とした写本と本文データ

調査対象とした巻は、源氏物語の第一帖「桐壺」から第五十四帖「夢浮橋」とした。このうち第一帖「桐壺」から第二十七帖「篝火」は、既に前稿[6]として報告をしている。本稿では、仮名字母の出現傾向の比較を行うため、調査済みの写本を含む源氏物語の全帖を対象としている。調査対象とした写本は、「蓬生」「若菜上」を欠き、江戸時代の補写である「総角」を除く紅梅本五十一写本と、明応四(一四九五)年に書写年代が近い写本である、書陵部本と大正大学本のそれぞれ五十四写本と、保坂本のうち、永正年間(一五〇四―一五二一)頃の書写かとされる室町時代に補写された「桐壺」から「絵合」までの十七写本、長享二(一四八八)年の実隆筆との奥書がある高松宮家本「松風」、仮名字母の出現傾向が実隆筆写本に似ている日大本の公順筆「胡蝶」、明応六(一四九七)年書写の天理図書館蔵の実隆筆「新撰菟玖波集」、伝実隆筆である書陵部蔵三条西家本「和泉式部日記」とした。本調査では、これらに加えて、三条西実隆が書写したとされる享禄四(一五三一)年書写の榊原家本「桐壺」と、天文二(一五三三)年書写の蓬左本「空蟬」「関屋」を追加した。尚、享禄三(一五三〇)年から四年にかけて書写された日大本に関しては既に調査し、仮名字母の出現傾向の点から、紅梅本と距離が近い写本は存在しないことが明らかになっている[7]。

調査対象に用いた、稿者が作成した本文データは、写本本文と同一の仮名字母、行数、改行位置を持つ。これまでの調査[2][3][4][5]から、仮名字母の出現傾向を調査するために必要な文字数は、少なくとも二千五百字以上、多くともおおよそ五千字以上あれば十分であることが明らかになっているので、五千字を目安として調査している。

本調査で用いた計百八十三写本のうち、紅梅本と書陵部本、大正大学本の第二十八帖「野分」から第五十四帖「夢浮橋」までの計七十九写本と、今回新たに調査した榊原家本「桐壺」と蓬左本「空蝉」「関屋」の本文データの集計結果を本稿末に表一としてまとめた。表一に掲載していない写本は前稿で掲載しているので、本稿では省略している。表一では、写本名と源氏物語であれば帖数、調査対象文字数を文字数、調査対象文字数中に出現した仮名字母数を字母数として表している。それぞれの写本の出典は、本稿末にまとめた。

四　調査手法

本調査では、異なる巻や異なる作品を比較することを想定し、特定の仮名字母ではなく本文に出現する全仮名字母を対象としている。そのため、仮名字母を統一した方針で収集し、統計手法を用いて分類する。調査対象としては本行本文を選択した。その際には、傍記を除き、一音の漢字は仮名と見做して文字を収集している。次に、出現する仮名字母を集計し、同音の仮名字母ごとに相対頻度を求め、これを「仮名字母の出現傾向」と見做す。この出現傾向に対して、統計手法を用いて分類する。

ここで写本の分類に用いた統計的手法は、「正しい」(とされる)分類結果といった「外的な基準」(外的徴証)が知られていないデータに対して、データの特徴といった「内的な情報」(内的徴証)だけに基づいてグループに分類する「教師なし分類」と呼ばれる手法である。本調査では、写本間の関係を概観するために主成分分析を、その詳細を分析するために階層的クラスター分析を用いた。主成分分析では散布図として、階層的クラスター分析では樹形図として、仮名字母の出現傾向の類似した写本が近接して図示される。

五　調査結果

統計的分類に基づく結果を主成分分析、階層的クラスター分析の順に検討する。主成分分析は、これまでの調査結果から書誌情報で同一書写者と指摘されている写本がグループに分類されることが多い結果を得られている。また、階層的クラスター分析は、主成分分析結果の詳細を検討し、同一書写者とされる写本間関係の親疎や、書写者に関する書誌情報がない写本に関して、何らかの関係の可能性がある写本を指摘することに適していることから、写本間関係の詳細を考察するために用いる。それぞれの分析方法に関しては注にまとめた。

五．一　主成分分析に基づく写本の分類

主成分分析の結果を図一に表す。図一では、二次分析として散布図をグループ分けし、楕円で示している。図一からは、右中央の楕円に紅梅本の写本が桃色で配置され、他の写本と分類されている。それ以外の写本に関しては、五つの楕円に分類されている。この結果からは、紅梅本の写本は同筆の可能性を指摘できる。

図一の楕円は重なり、グループを構成しているが、グループには異なる一揃えの写本の一部が含まれている。それらが同筆であるとは考えにくく、その詳細を考察することは困難である。今回用いた調査方法では、あらかじめ指定するグループ数を増やすことで分類を細分化することも可能であるが、適切なグループ数は事前には明らかではない。また、適切なグループ数といった外的な基準なしに多数のグループの相互の関係を検討することは容易ではない。これまでの調査結果から、主成分分析の結果は、同筆とされる写本に関してはグループを構成し分類されることが多いが、それ以外の写本について解釈をすることは困難であることが多い。加えて、仮名字母の出現傾向に基づいた分類

では、およそ百から百十程度の個別の仮名字母の相対頻度をデータとして用い、大量の写本を比較対象に用いているため、ある特定の仮名字母の出現傾向の変化と分類結果の関係を統一的に論じることは困難である。このため、分類結果と書誌情報に基づき写本間関係を概観することには適しているが、仮名字母と分類結果の関係の詳細を検討することは難しい。

五・二　階層的クラスター分析に基づく写本の分類

次に、写本間関係の詳細を検討するために階層的クラスター分析の結果を示す。図二では、巻名を示す文字列に、写本名に加えて、実隆に関係した写本の場合は伝承筆者、書写年代、所蔵者を加えた。図を用いて分類するために、写本をグループに分類する距離を1.64として点線を引いている。これは、この点線より距離が近いグループを同筆の可能性がある写本として検討するためである。距離の値の選択は、調査対象とした分野の知識に基づいて決定される。これまでの同様の手法を用いた調査結果に基づくと、同筆写本は距離1.64以下でグループを構成することが多い結果が得られているので、本調査においても採用している[5]。

分類された結果の詳細は次章で述べるので、ここでは概略を述べる。図二からは、下部に桃色で強調された紅梅本がグループを構成していることが示されている。緑色で強調されたグループは(伝承筆者を含む)実隆筆写本と写本間距離が近い写本である。これ以外の色づけして強調された群の中には、同じ一揃えの写本である書陵部本内でグループを構成するだけではなく、異なる一揃えの写本間でグループを構成する場合もあることが明らかになった。同じ一揃えの写本内で写本間距離が近いグループは赤色で強調している。異なる一揃えの写本間でグループを構成する写本は水色で強調している。

六　考察

調査結果に基づき、(1)明応四年に近い時期の実隆筆写本と距離の近い写本の探索と、(2)この時期の実隆筆写本と距離の近い紅梅本の存在の有無の確認、(3)紅梅本と写本間距離が近い写本の探索をする。最後にその他の写本に関して述べる。

六・一　明応四年に近い時期に書写された実隆筆写本と距離の近い写本の存在の有無

図二の階層的クラスター分析の結果の一部を図三として表す。図三は図二において緑色で強調した写本群を拡大表示している。図三においても、同筆の可能性がある写本間距離1.64にて点線を引いている。この点線以下でグループを構成している写本は同筆の可能性がある。

図三では、奥書より実隆筆写本を転写していると考えられる日大本「胡蝶」と実隆筆とされる高松宮家本「松風」、書陵部本「帚木」は、グループを構成している。書陵部本「帚木」については、実隆筆と考えられる写本と距離が近い結果を前稿で報告している。今回の調査では、これらの写本と写本間距離が近く、隣接するグループを構成する写本として、伝実隆筆とされる「和泉式部日記」と書陵部本「東屋」が同一のグループに分類された。加えて、実隆筆とされる榊原家本「桐壺」と蓬左本「空蝉」が、紅梅本「横笛」とグループを構成している。この「横笛」を含むグループに関しては後述する。

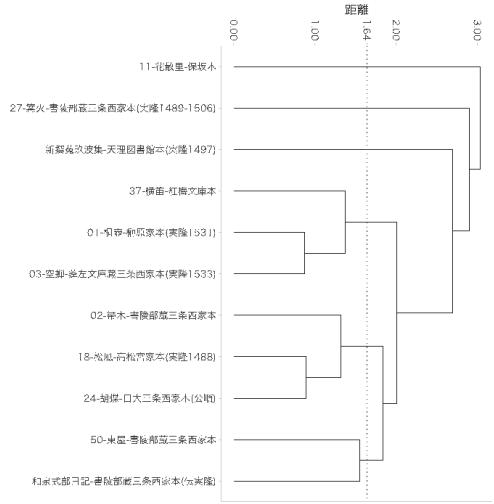
これら三グループは相対的には互いに近い距離に存在することも明らかになった。但し、それぞれのグループに分類された写本は、仮名字母の出現傾向の類似性を示しているだけで、必ずしも筆跡の類似性を示してはいない。一つ

の可能性として親本である実隆筆写本を実隆周辺の人物が仮名字母まで一致する書写をしたことにより、グループを構成していることも考えられる。この様に仮名字母の出現傾向の類似性に基づいた分類は、写本間に何らかの関係の存在を示している可能性があるが、その詳細は本手法では明らかにできない。

図三では、参考までに実隆筆の新撰菟玖波集と書陵部本「篝火」、伝承筆者が実隆とされる保坂本「花散里」を掲載した。これらの写本は前述したグループに隣接する位置にあるが、同筆の可能性がある距離には存在しない。明応四年に近い時期に書写された実隆筆写本には書陵部本「篝火」がある。しかし、この写本は本文文字数が少ない。これまでの調査から、調査した文字数が少ない写本は、文字数が少ないためか、または、仮名字母の出現傾向が他写本と異なり偏在しているためか、どちらかの理由で仮名字母の出現傾向が安定せず、写本間距離が遠くなる傾向がある。このため、同筆との指摘がある写本であっても、一定の距離以下でグループを構成することは少ない。

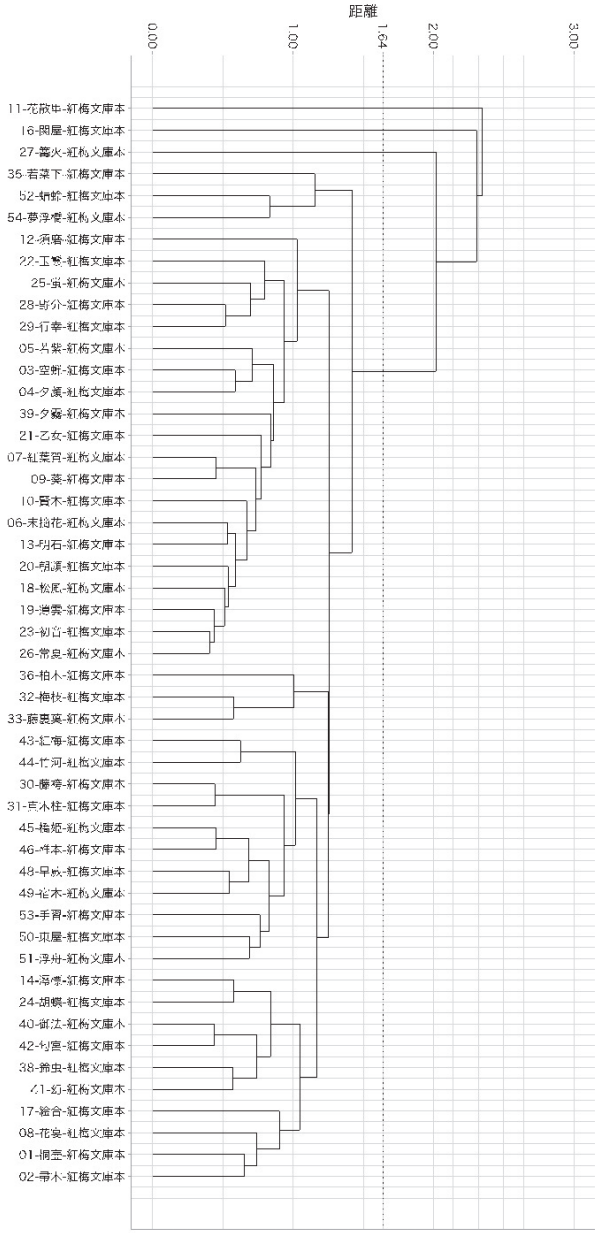
六・二　実隆筆写本と距離の近い紅梅本の写本の存在の有無

調査した全写本を概観した図一と、その詳細を示した図二の結果からは、実隆筆の可能性がある写本と、桃色で示したグループを構成している紅梅本は写本間距離が遠く、それぞれ別のグループを構成することが明らかになった。図二の階層的クラス



図三　実隆筆写本と距離の近い写本間関係

ター分析の結果のうち、紅梅本に関係したグループを図四として表す。このことから、グループを構成している紅梅本の写本の中に、今回調査対象とした実隆筆と近い写本は存在しなかった、と言える。但し、グループを構成する紅梅本は、同筆の可能性がある写本間距離1.64以下に存在し、同筆である可能性を指摘できる。また、このグループに属さない紅梅本はこの周辺に位置している。具体的には、このグループに隣接して「花散里」と「関屋」、「篝火」が、図四の上部に位置している。これらの写本は共に本文が千五百字程度と短いという共通点がある。



図四　紅梅本の写本間関係

六．三　紅梅本と写本間距離が近い写本の探索

六．一節で述べた様に、明応四年に近い時期に書写された実隆筆かと考えられる一部の写本は、グループを構成している。このことからは、同時期に書写された実隆筆写本は互いに似た仮名字母の出現傾向を持つ可能性があると考えられる。仮に、紅梅本の中にこの時期の実隆筆写本と仮名字母の出現傾向が近い写本が存在したとすると、この写本グループと距離が近い結果となる可能性が高い。しかし、六．二節で述べた様に、今回の調査からは、グループを構成している紅梅本に、実隆筆写本と距離が近い写本は存在しなかった。この結果からは、紅梅本の少なくとも二度の転写によって、仮名字母の出現傾向に、明応四年に近い時期に書写された実隆筆の影響が残っている可能性は低い、と言える。

但し、紅梅本のうち「横笛」はこの他の紅梅本と距離が相対的に遠く、図三に示されている様に、今回調査対象とした榊原家本「桐壺」と蓬左本「空蝉」が紅梅本「横笛」に近いことが明らかになった。紅梅本「横笛」以外の紅梅本の写本はグループを構成していることから、この写本だけ異なる仮名字母の出現傾向を持ち、それが享禄四年または天文二年に書写された実隆筆写本と、同筆の可能性がある距離に存在する、と言える。紅梅本の書写年代は足利末期[1]とされていることから、これら実隆筆写本とは書写年代が異なる。また、実隆筆写本と同時期に書写されている日大本「横笛」は公条筆[7]であり、日大本「横笛」を転写した写本の存在を仮定すると、その写本が実隆の仮名字母の出現傾向を持つ可能性は低いと考えられる。一つの可能性として、実隆筆「横笛」が存在し、紅梅本を書写した人物がそれを転写したことが考えられる。この他にも様々な可能性が考えられるが、これらの可能性を支持する根拠は仮名字母の出現傾向の類似性以外に存在しない。

この様に本手法では、仮名字母の出現傾向の類似性から写本間に何らかの関係がある可能性を指摘することができるが、残念ながら「横笛」だけが異なる理由や、写本の書写年代の前後関係といったことは明らかにはできない。また、

調査済み写本と何らかの関係が存在することを想定できる未調査の写本によって、分類結果が変化する可能性もある。例えば、未調査の実隆筆写本との比較により、分類結果が変化する可能性もある。一調査結果だけに依拠した議論は、今後の調査結果によって覆る可能性があるため、資料の探索や調査、複数の手法の適用や開発によって、その蓋然性を高めることが必要である。

六・四　その他の写本に関する考察

今回の調査では、書写年代が近いとされる書陵部本や大正大学本の全帖に保坂本を加えて、紅梅本と比較した。図二の結果からは、同筆の可能性がある距離でグループを構成する仮名字母の出現傾向が似た写本は、同時代に書写されたかと考えられる写本であっても多くはないことと、グループを構成する場合では、同じ一揃えの写本内でグルー

表二　グループを構成する写本

写本名	写本間距離が近いグループ
大正大学本	（38 鈴虫 ,43 紅梅）, （29 行幸 ,42 匂宮）, （26 常夏 ,37 横笛）, （22 玉鬘 ,31 真木柱 ,35 若菜下 ,40 御法 , 39 夕霧 ,44 竹河 ,36 柏木 ,41 幻）, （45 橋姫 ,46 椎本）, （10 賢木 ,48 早蕨）, （34 若菜上 ,50 東屋 ,51 浮舟）
書陵部本	（23 初音 ,25 蛍）, （09 葵 ,32 梅枝）, （24 胡蝶 ,47 総角）, （54 夢浮橋 ,03 空蝉 ,07 紅葉賀）, （26 常夏 ,37 横笛 ,44 竹河）, （15 蓬生 ,38 鈴虫）, （21 少女 ,36 柏木）, （48 早蕨 ,39 夕霧 ,53 手習 ,10 賢木 ,20 朝顔）,
保坂本	（12 須磨 ,14 澪標 ,06 末摘花 ,07 紅葉賀）,
異なる一揃え	（13 明石 - 保坂本 ,13 明石 - 書陵部本）, （05 若紫 - 書陵部本 ,21 少女 - 大正大学本）, （03 空蝉 - 保坂本 ,08 花宴 - 保坂本 , 28 野分 - 書陵部本）, （01 桐壺 - 書陵部本 ,03 空蝉 - 大正大学本）,

プを構成することが多いことが明らかになった。

同じ一揃えの写本内でグループを構成する写本と異なる一揃えの写本間でグループを構成する写本を表二にまとめた。括弧で示したグループが同筆の可能性がある写本である。

これらのグループの写本の中には伝承筆者を同じくする写本が存在する。仮名字母の出現傾向が似た写本は、何らかの写本間関係があり、例えば、同一人物が複数の写本の書写を担当している可能性や、異なる筆跡であるにも関わらずグループを構成する場合は、同筆の親本を仮名字母まで忠実に書写した可能性が指摘できる。

七　まとめと今後の課題

奥書とは異なる根拠に基づいて紅梅本を位置付けるために、同時期に書写されたと考えられる源氏物語写本の本文の仮名字母の出現傾向に着目して、比較を行った。明応四年と近い時期の実隆筆かと考えられる写本と距離が近い写本を紅梅本の中に発見することはできず、仮名字母の出現傾向の点からは、その時期の実隆筆と関係があることを示すことはできなかった。その一方で、実隆筆写本である享禄四年に書写された榊原家本「桐壺」と天文二年に書写された蓬左本「空蝉」、紅梅本「横笛」の写本間距離が近いことが明らかになった。これに関しては、本手法ではその詳細を明らかにすることはできず、関連する分野の調査が必要であることを指摘した。

日大本の調査[7]において実隆筆写本は、同筆の可能性がある距離に多くの写本が集まり、いくつかの小グループを構成するが、公条筆写本と比較して相対的には仮名字母の出現傾向が一定しないことが明らかになっている。日大本の調査と今回の調査結果に基づくと、実隆筆の可能性がある源氏物語写本は、巨視的に見れば日大本とそれ以外の写

本にグループを構成する可能性がある。今後も実隆筆及びその関連写本の調査を続け、その性質の考察を続けたいと考えている。

謝辞
本研究はJSPS科研費JP19K00349の支援により実施された。

注

主成分分析では、似た出現傾向を持つ字母や全く出現しない字母、互いに相関係数が大きい二つの字母のうちの一つを削除し、計96字母を調査対象とした。主成分の計算方法として相関行列を用いた。加えて、主成分分析の二次分析としてk平均法を用いた非階層的クラスター分析を行って、グループに分類した結果を図示している。階層的クラスター分析では、写本間距離と、写本をグループに構成する、二つの計算方法を用いる。写本間距離の計算方法としてIR距離［8］を、グループを構成する計算方法として平均距離法を用いた。

参考文献

[1] 上野英子「源氏物語三条西家本の世界 ― 室町時代享受史の一様相」武蔵野書院 二〇一九
[2] 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた藤原定家書写資料の調査」情報処理学会論文誌 Vol.59 No.2 315-322（Feb. 2018）
[3] 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた日本大学蔵三条西家本源氏物語の調査」人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 Vol.2018 No.1 59-66（Dec. 2018）
[4] 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた大島本源氏物語の調査」人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 Vol.2019 No.1 157-164（Dec. 2019）
[5] 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた尾州家河内本源氏物語関連写本の調査」情報処理学会論文誌 Vol.61 No.2 144-151

(Feb. 2020)
[6] 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付け（1）」実践女子大学文芸資料研究所年報第39号（二〇二〇年三月）
[7] 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた紅梅文庫旧蔵本源氏物語の調査」淑徳大学経営学部・教育学部研究年報 二〇二〇
[8] 金明哲「テキストデータの統計科学入門」岩波書店 二〇一一

出典

調査対象写本は、出版または画像公開された写本を対象としている。特に書名のない写本は源氏物語を表している。

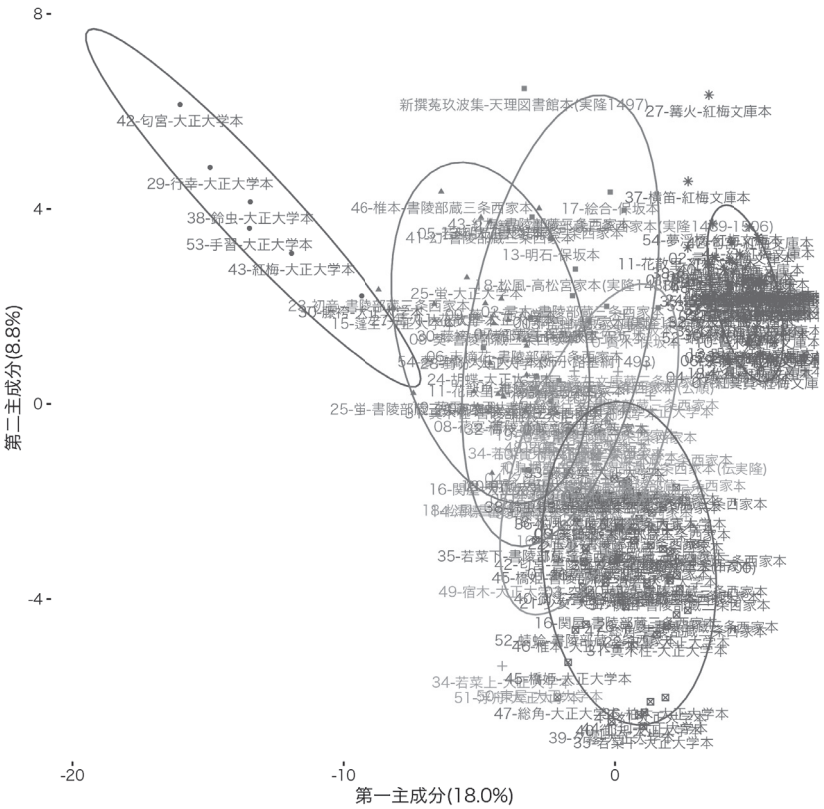
・紅梅本（紅梅文庫旧蔵本）実践女子大学文芸資料研究所上野英子教授より画像を閲覧させていただいた
・書陵部本（書陵部蔵三条西家本）宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システム https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000629260000
・保坂本 保坂本源氏物語第一巻～第四巻 おうふう 一九九五、一九九六
・大正大学本 大正大学図書館・研究所 源氏物語写本 https://tais.ac.jp/library_labo/library/genji/
・日大本（日本大学蔵三条西家本）日本大学蔵源氏物語第五巻三条西家証本 八木書店 一九九五
・高松宮家本 高松宮御蔵河内本源氏物語第4巻 臨川書店 一九七三
・榊原家本 国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200016474/viewer/1
・蓬左本（蓬左文庫蔵三条西家本）源氏物語青表紙本54巻・目録2巻・極1巻56冊・1冊 請求番号 1-1644
・和泉式部日記（書陵部蔵三条西家本）宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システム https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000613360000?searchIndex=7
・新撰菟玖波集（天理図書館蔵）天理図書館 善本叢書 和書之部 第二十巻 新撰菟玖波集 實隆本 八木書店 一九七五

表一　調査対象とした写本と文字数

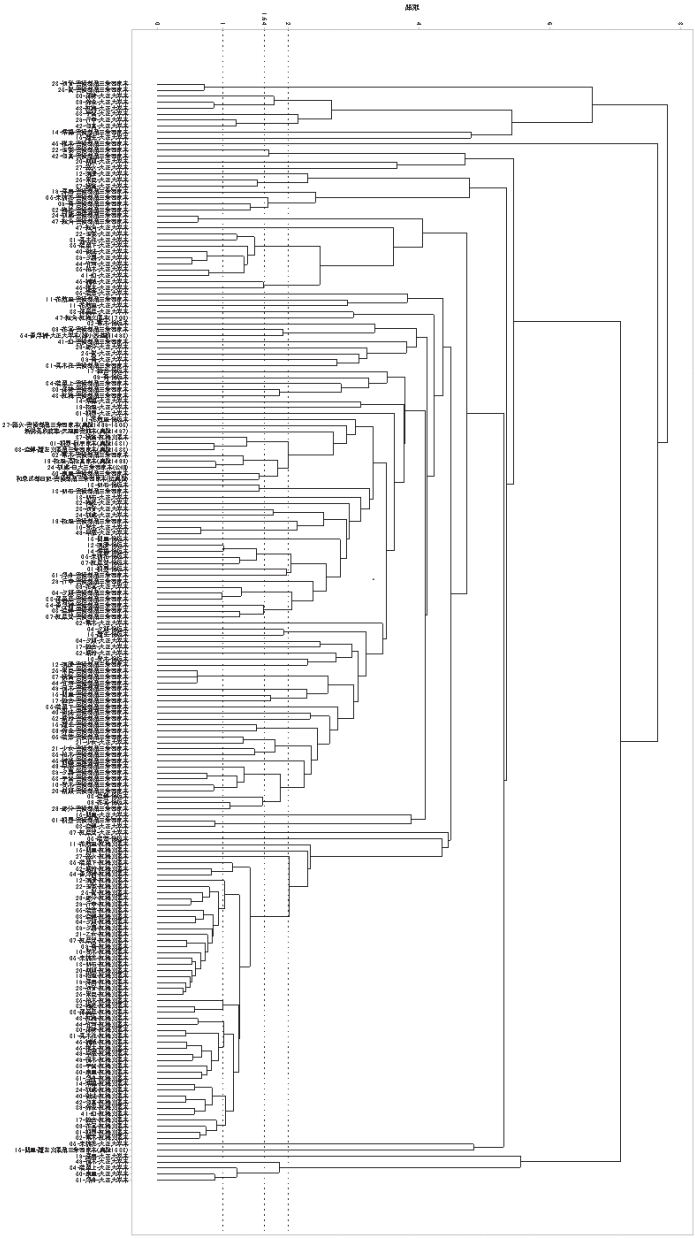
表の上部に源氏物語写本のうち、紅梅本、書陵部本、大正大学本、保坂本を、下部にそれ以外の写本をまとめた。第一帖から第二十七帖と実隆に関連する四写本は前稿に記載しているため、ここでは第二十八帖から第五十四帖までを記載している。

	紅梅本		書陵部本		大正大学本	
巻	文字数	字母数	文字数	字母数	文字数	字母数
28- 野分	6678	107	6725	114	6538	116
29- 行幸	11517	112	10961	118	11568	117
30- 藤袴	5707	103	5775	113	5620	113
31- 真木柱	6330	102	6144	116	6111	102
32- 梅枝	5374	107	5379	110	5390	108
33- 藤裏葉	5369	101	5530	113	5246	112
34- 若菜上			5709	111	5695	98
35- 若菜下	5457	105	5423	117	5513	92
36- 柏木	5238	107	5063	118	3259	96
37- 横笛	5424	117	5498	97	4767	113
38- 鈴虫	5803	113	5690	116	5811	113
39- 夕霧	5551	107	5485	106	5382	93
40- 御法	5846	115	5677	111	5674	97
41- 幻	6569	118	6423	113	6359	95
42- 匂兵部卿	5720	116	5286	107	5204	121
43- 紅梅	5309	105	5047	115	5177	112
44- 竹河	5488	105	5394	98	5018	99
45- 橋姫	15678	117	5068	104	5172	104
46- 椎本	5375	100	5439	113	5472	101
47- 総角	3253	99	5330	101	5634	103
48- 早蕨	7338	110	7070	105	6619	123
49- 宿木	5570	105	5672	104	5720	100
50- 東屋	5662	100	5695	111	5587	102
51- 浮舟	5310	103	5323	112	5236	101
52- 蜻蛉	5473	104	5498	110	5161	103
53- 手習	5361	102	5312	110	5200	121
54- 夢浮橋	5486	104	5492	110	5371	118

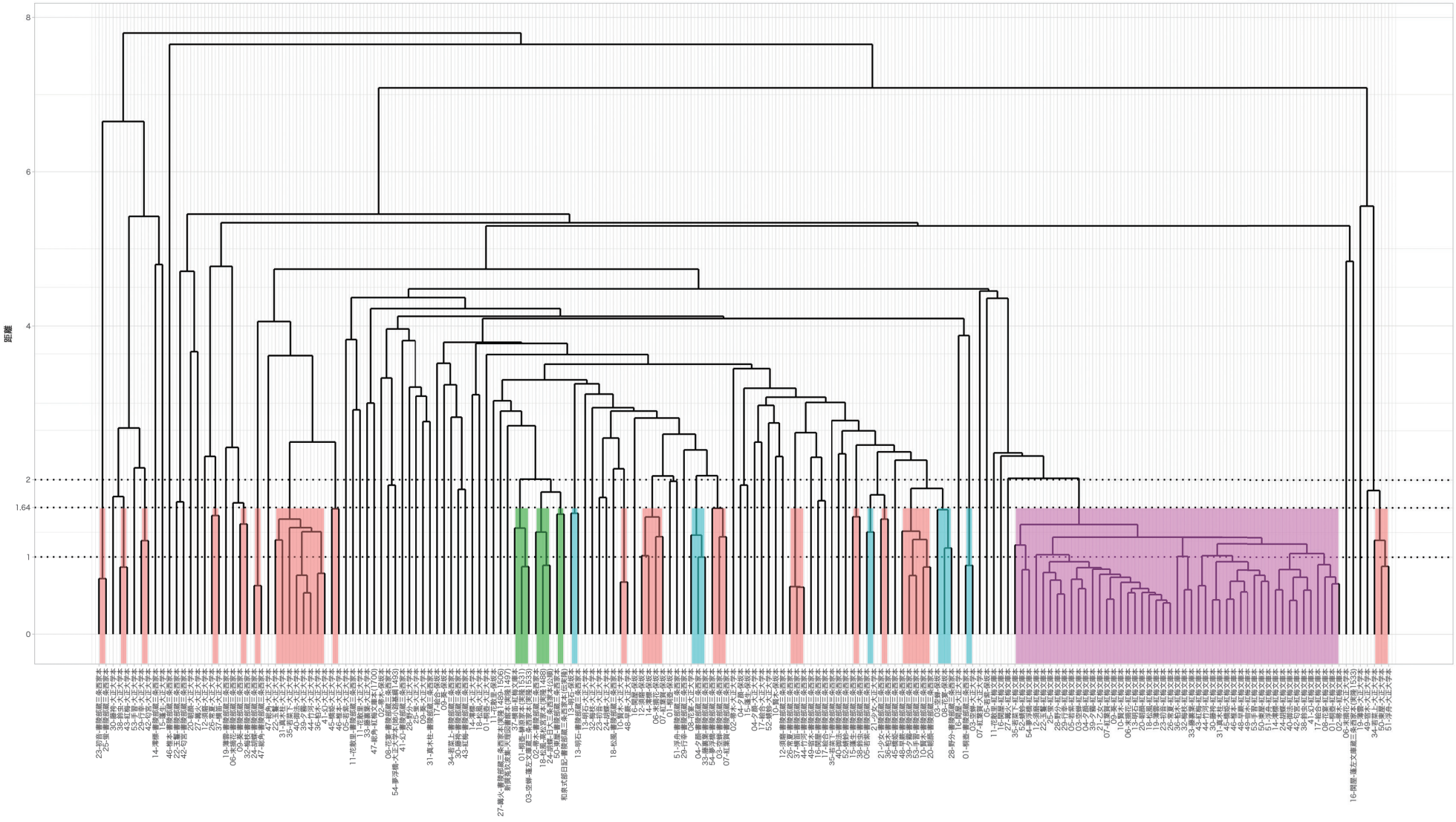
	文字数	字母数
榊原家本「桐壺」	5679	120
蓬左本「空蝉」	4573	111
蓬左本「関屋」	1970	99


8
4
0
-4
-20
-10
0
第二主成分(8.8%)
第一主成分(18.0%)
42-匂宮-大正大学本
29-行幸-大正大学本
38-鈴虫-大正大学本
53-手習-大正大学本
43-紅梅-大正大学本
新撰菟玖波集-天理図書館本(実隆1497)
27-篝火-紅梅文庫本
37-橋姫-紅梅文庫本
46-椎本-書陵部蔵三条西家本
17-絵合-保坂本
13-明石-保坂本
25-蜻-大正大学本
34-若菜上-大正大学本
47-総角-大正大学本
39-若菜中-大正大学本

図一　主成分分析の結果



図二　階層的クラスター分析の結果(口絵参照)



階層的クラスター分析の結集図